追悼　津田良平先生を偲んで

本モニタリング事業に多大な協力をいただいた、近畿大学教授津田良平先生は、1997年6月28日、肝臓ガンのため永眠されました。津田先生は1941年兵庫県の御出身で、1965年北海道大学水産学部卒業、1970年同大学院終了（水産学博士）の後、近畿大学農学部水産学科に奉職され、1987年からは教授として教育および研究に精力的に取り組まれてきました。本モニタリング事業においても、立案段階の1990年から「東アジア海域環境モニタリング検討会」に欠かさず参加していただき、様々な面でご指導くださいました。この検討会の中には、神戸フェリーターミナルに停泊中の「フェリー檀皇」、同船にモニタリング装置や配管を設置中であった幸陽ドック（広島県三原市）などで行われた現地委員会も含まれます。また、本モニタリング事業は、日韓科学技術協定および日韓環境保護協定により、韓国海洋研究所（KORDI）との共同事業としてスタートしたのですが、津田先生は同研究所政策開発室長の安熙道先生をはじめとする知己が多く、両国の橋渡しにも貢献されました。

事業開始にあたっては、1991年3月、神戸－釜山間の最初の乗船調査に参加していただきました。この時は、フェリーによる計測を手探りで開始したところでしたので、試行錯誤の連続でした。特に排水方式の検討が十分でなく、海水を船底から上階のスカッパー（排水溝）までバケツリレーで汲み上げる作業が徹夜で続きました。津田先生はみずから先頭に立たれ、ほとんど寝ずに作業に加わって下さいました。

この航路が廃止の後は、関西汽船の「さんふらわあ２」と「フェリーくろしお」でモニタリングを継続することになりましたが、津田先生は、レーザーを利用した植物プランクトン粒子の計測に取り組まれてきました（報文9参照）。一時、装置がうまく作動せず、船のエンジンの振動が懸念されました。このとき、装置をゴムで上からつるし振動を吸収するアイディアで、「八百屋のおつりや」ということになりました。ピンとこない方も多いと思いますが、ひと昔の公設市場などでは、レジのかわりに百円札や小銭のカゴが天井からゴム紐でぶらさがっており、店のおばさんがひょいと延ばして勘定をすませるのが普通だったのです。これも津田先生にまつわる思い出の一つです。

また、先生は、1995年6月と1996年3月のそれぞれ１ヶ月間、研究室の学生をフェリーに乗船させ、同一地点を通過するたびに植物プランクトンをサンプルする仕事に取り組まれました。学生諸君にとっては、１ヶ月夜間作業を続けたこと、船員さんと寝食を共にしたことが貴重な経験になったようです。私共にも、津田先生の、教育者としてのきびしさと配慮が感じられたものでした。そして、大阪湾で得られた時系列データでは、ケイ藻類が渦鞭毛藻類よりも速く、指数関数的に増殖してゆく様子がみられました。すなわち、これまで培養実験や理論から推定されていた増殖形態が、条件さえ合えば現実の海域でも確実に起きていることがわかったのです。このことは、今後、現象のモデル化に取り組む際の大きな力づけとなりました（報文15参照）。

1997年１月の検討会が、私共が先生とお会いした最後の機会になりました。先生を失ったことは余りにも大きな痛手でありますが、先生のご尽力を無駄にしないよう努めることで、せめてもの追悼としたいと存じます。

関係者一同



フェリーさんふらわあ２船上にて　　1994年7月

CGER REPORT

フェリー利用による海洋環境モニタリングおよび
関連研究に関する総合報告書

CGER-M007-2000

2000年12月発行

発　行　環境庁国立環境研究所
照会先：地球環境研究グループ海洋研究チーム
地球環境研究センター　交流係
〒305-0053　茨城県つくば市小野川16-2
電話(0298)50-2508　FAX(0298)50-2569
E-mail: harashim@nies.go.jp
cgercomm@nies.go.jp

本報告書は再生紙を使用しております。